



海外から 研修員に聞く



タネル・
カワソオウルーさん
(トルコ共和国)
Mr. Taner Kavasoglu
トルコ国家計画庁企画専門官
DOCAPプロジェクト・コーディネーター

JICA札幌「トルコ東部黒海地域人材育成」コース (2006年11月5日～12月9日)で研修

東部黒海沿岸地域の開発に北海道の経験を

東部黒海沿岸地域とは、トルコの国土にあたるアナトリア半島の付け根、黒海側、グルジアと接する辺りをいう。トラブゾン、ギレスン、リゼなどの都市がある。自身もこの地方の出身のタネルさんは、アンカラなどの西部と比べるとまだまだ開発が進んでおらず、特にサービス業は遅れている。そこで、今回、リーダー格のタネルさんの他地域内の4都市から各2名ずつ、地元テレビ局の経営者を含め、観光、酪農、中小企業の分野の代表と官庁担当者など第一線で仕事をしている人たちがやってきた。「メンバーたちは、帰国したら、北海道ではどんなことが、どんなふうに行われているかみんなで地元の人たちに伝えますよ」と胸を張った。

2004年、トルコ政府国家計画庁の地域開発担当次官補がJICA札幌の地域開発の研修コースに参加した。その次官補が、「地域開発にはまず人材育成が大事であり、トルコ東部黒海沿岸地域の開発の促進のために北海道の経験やノウハウの移転を」と政府に進言したことがこのコース開設の発端であった。2006年度は特に観光分野に重点がおかれて、道南、道北など各地の地域振興の実際を視察、研修した。

「トルコ人は日本が大好きなんです」

よくトルコ人は概して親日的だと聞く。「とにかくトルコ人は日本が好きなんです。先祖がつながっているとか、共通のDNAがあるかもしれないとか、

理屈では説明できないけれど日本が好きなんです」とタネルさん。

そういえば、イラン・イラク戦争でテヘランの日本大使館に大勢の日本人が孤立した時、彼らを救出にイランまで飛んだのはトルコの民間航空機だったことを思い出す。

その後日談。その救出機のパイロットは無事にトルコに着陸して(撃ち落とされなかった)。これで子どもたちに、家族に会えると涙したという。それでも彼は日本人を助けに飛んだ、とトルコ国内で語られているという。

タネルさんは、その大好きな日本が、日本人が悪く言われるの嫌だらう時には苦言も呈したらしい。「どこでも、いつでも、良い国、良い人と見られる日本、日本人であって欲しいのです」



「ウワー、トルコの人だ！」と歓喜した高校生

立派な体格で強そうな印象のタネルさんは地下鉄の電車の中でも目立っていたに違いない。横目でチラリチラリと見ていた高校生たちに自分から声をかけてみた。高校生たちは喜々として「どこの国から来なんですか?」と聞いてきた。「トルコから」と答えると、「ウワー、トルコの人だ!」とヤンヤの反応。「彼らの反応を見てすごく可愛いと思いました」。滞在中の楽しい体験のひとつだそうだ。

困ったこと

商店で言葉がわからないからと断られたこと。「そんな難しい買い物ではなかったのに…」タネルさんは2度目の来日なのでまだ理解できるが、「初めて日本で暮らす人は、その印象を持って帰国するのでこういうことはとても残念だと思いますよ」とここでも親切的なトルコ人の顔がのぞいた。

日本人もトルコが好きで、特に歴史的な観光地には日本からのツアーやが目白押しらしい。「国中に世界遺産が散らばっているようなものです。是非、見に来て下さい」と大歓迎。新石器時代の紀元前6500年前から現在まで13にのぼる文明が興亡した。エーゲ海から地中海沿岸のリゾートも人気があるようだ。詳しくは、トルコ政府観光局<http://home.turkey.or.jp/ja/menu.html>。

通貨はTRL(トルコリラ)で、1円=13.5TRL(2003年末現在)

NRCニュース

「開発教育ファシリテーター養成事業」 海外研修を実施(平成18年12月22日～29日)

12月22日から29日までの8日間、「開発教育ファシリテーター養成事業」の一環として、講師の大津和子教授(北海道教育大学)ほか10名がベトナムとカンボジアへスタートアップに訪れた。現地で訪問したストリートチルドレンの支援施設や障がい者の職業訓練校などでは、直接子どもたちとふれあい、話を聞くことができた。参加者からは「施設の子どもたちの明るさと前向きな姿勢に驚かされた」という声も聞かれ、現地を訪れて多くの収穫を得た。この後研修会を実施し、海外研修での成果を元に、ファシリテーターとしての教材を完成させた。
(国際協力部)

北海道技術研修員ら、積丹へ(平成19年2月3～4日)

北方圏センターでは、平成18年度、ブラジルやパラグアイ、カナダ・アルバータ州などから技術研修員や留学生として、8名を受け入れている。

このほどその研修員・留学生のうち3名が積丹町余別の余別小学校で行われた国際交流「冬の集い」に参加した。余別小学校では日本の伝統に触れながら、外国人の人たちと交流しようとする毎年この行事を続けている。地元に宿泊しての2日間、餅つき大会や雪中運動会で児童たちと遊んだり、PTAのメンバー、先生たち、地元の人びとの交流会に参加して親睦を深めた。参加した研修員の1人は「私にとって積丹での経験は貴重な思い出になりました。雪は子供の頃からの憧れでした」と感想を語っていた。
(国際協力部)



読売杯ミニバレー大会に参加(平成19年1月20～21日)

十勝管内大樹町で生まれたミニバレーは手軽にできるスポーツとして人気がある。北方圏センター札幌国際センターでは希望する研修員などとともに、1月20日(土)～21日(日)に開催された第13回読売杯全道155ミニバレー大会インターナショナルの部に参加した。「155」とは、ネットの高さ1.55㍍にちなんだり。1チームの選手年齢の合計も155歳を区切りとして開催しているが、インターナショナルの部は年齢制限を設けていない。

参加したのは、アゼルバイジャン、ブラジル、グルジアなどのJICA研修員23名とスタッフ9名。7チームを組んでリーグ戦方式での試合に臨み、3チームが入賞した。

今大会には、北海道ミニバレー協会が招いたロシア・サハリンの国立サハリン大学の教授等一行も参加し、初参加で初優勝した。ミニバレーの広がりぶりを感じさせた。

(交流部、札幌国際センター)



赤のユニフォームのロシア・サハリンチーム(優勝)、水色のビブの日系チーム(準優勝)、同じく水色ビブのユーラシアチームと日中混成オリンタル・マジック・チーム(3位)。みんな頑張りました